

道元の女性観

——道元の「女人成仏」観と思想的変遷の問題に関連して——

中 野 優 子

一 問題の所在

道元の女性観を考察する上で、避けて通れないのは「女人成仏」に関わる問題である。

道元の「女人成仏」観は、曹洞宗学では、道元の思想的変化に関する論争の一環として論じられてきた。

今回は試みとして、女性学あるいはジェンダーの視点から、従来の宗学で今までなかった異なる視座を持ち込み、問題を喚起したい。

二 道元と「女人成仏」

論争の火種となった文言は、『正法眼蔵』『出家功德』の巻以下の箇所である。

三世十方諸佛、みな一佛としても、在家成佛の諸佛まします。過去有佛のゆゑに、出家受戒の功德あり。衆生の得道かならず出

家受戒によるなり。おほよそ出家受戒の功德、すなはち諸佛の常法なるがゆゑに、その功德無量なり、聖のなかに在家成佛の説あれど、正伝にあらす。女身成佛の説あれど、またこれ正伝にあらす。佛祖正伝するは、出家成佛なり。⁽¹⁾

ここでは明確に「在家成仏」・「女身成仏」が否定されている。この巻では、道元は、女性が成仏できる可能性を否定している。しかし、「礼拝得髓」の巻では、

しかあるに、不聞仏法のたぐひおもはくは、われは大比丘なり、年少の得法を拝すべからず、われは久修練行なり、得法の晩学を拝すべからず。われは師号に署せり、師号なきを拝すべからず。われは法務司なり、得法の余僧を拝すべからず。われは僧正司なり、得法の俗男俗女を拝すべからず。われは三賢十聖なり、得法せりとも比丘尼等を礼拝すべからず。われは帝胤なり、得法なりとも臣家相門を拝すべからずといふ。かくのごとくの癡人、いたづらに父国をはなれて、他国の道路に踰躋するによりて、仏道を見聞せざるなり。

道元の女性観（中 野）

むかし唐朝趙州真際大師、ころをおこして禿足行脚せしちに
みにいふ、たとひ七歳なりとも、われよりも勝ならばわれかれに
とふべし、たとひ百歳なりとも、われよりも劣ならばわれかれを
しふべし。

七歳に問法せんとき、老漢礼拝すべきなり。奇夷の志気なり、
古佛の心術なり。

得道得法の比丘尼出現せるとき、求法参学の比丘僧、その会に
投じて礼拝問法するは、参学の勝鬪なり。⁽²⁾

と、得法しているならば、たとえその人物が女性であっても
在家であつても子供であつても尊崇を受けるに値するとし
て、「女人成仏」「在家成仏」を認めている。

三 思想的変遷論争と「女人成仏」

このように「出家功德」の巻と「礼拝得髓」の巻の間に
は、一見すれば矛盾すると思われる記述がなされている。二
つの巻の間には、撰述年代にかなりの差があり、前者は説示
年不詳だが「出家」の巻の加筆改稿とされるため一二四六年
以降の成立、後者は一二四〇年とされ、⁽³⁾また、七十五巻本と
十二巻本の内容に関する一連の宗学的議論によって、ここに
道元の思想的变化の有無に対する論議が生じてきたのであ
る。その経緯を詳述することはここでは避けるが、道元の述
べている「女人成仏」「在家成仏」をどのように捉えるかに

よつて、思想的変遷に関する見解が分かれるのである。

では、実際、どのような議論であつたのか。以下に女人成
仏に言及している研究者の議論の一部を、取り上げてみよ
う。

まず、伊藤秀憲氏は、「出家の中には女性の出家者（比丘
尼）も含まれており、女身成仏の否定を、女性が成仏するこ
とを否定したものであると取ることは、出家成仏の一部をも
否定することになり矛盾する。女性の成仏を否定したのでは
なく、（中略）女性はそのままの身では成仏できず、転女成男
して成仏すると説かれる説を否定したものと考えるべきであ
ろう」とし、さらに「そう取ることによって、この文も矛盾
なきものとして理解でき、礼拝得髓の巻で、得法の男女に差
別を認めない禅師の意図にそうものと言えよう」と述べ、道
元に思想的变化がなかったことを主張している。

これに対して今枝愛真氏は、旧仏教の圧迫等による思想の
鈍化により、在家主義から出家至上主義への思想的な変化が
顕著にあったと主張している。⁽⁴⁾

また、石川力山氏は、「越前に移られる前後を境にして、
『弁道話』『礼拝得髓』などに見られた在家・女人成仏容認の
主張は影をひそめます。（中略）『三十七品菩提分法』には、
（中略）出家をしない者に仏道成就はあり得ない、と言ってい
ます」⁽⁵⁾と思想的变化を認めている。

このように、「女人成仏」を介して道元の思想変化の有無が問われている。

これらの先行研究を一瞥した限りでは、道元は、女性性は男性にならなければ成仏できないという「変成男子」「転女成男」説を超克できなかったように思われる。それは禪師が「竜女」を多用していることから窺うことができる。

「竜女」はもちろん『法華経』『提婆達多品』の「竜女成仏」譚のことである。これは、八歳の竜女の娘が、女性性は成仏することができないというシャーリ・プトラ長老の言葉に対して、刹那に女性の身を転じて、男性の姿となつて成仏したという有名な話であるが、同じ箇所、女性が転輪聖王や仏陀など五種の存在になれないという「五障」説も記されている。この「竜女成仏」譚は、成仏できない女性の「救済」のために「考案」された「変成男子」のための物語であり、我が国においては古くから「女人救済」の經典としての地位を得ていた。

『法華経』を奉じていた道元が、この「竜女成仏」譚に強い印象を持っていた、それを『正法眼蔵』に用いたとしても不思議ではないだろう。

「たとひ七歳の女流なりとも、すなはち四衆の導師なり、衆生の慈父なり。たとえば竜女成仏のごとし」という「礼拝得髓」の記述にあるように、道元が「竜女成仏」譚における

八歳の龍王の娘が男性の身体となつて成仏したという「変成男子」説を前提にして論を展開していることはほぼ間違いないであろう。

四 結語

こうしてみると道元は、「女人成仏」に関してやはり否定的であつたように思われる。「変成男子」思想については、先の『法華経』『竜女成仏』譚の影響も考慮に入れると、道元が「変成男子」説、つまり「女身成仏」説までも否定していたということは考えにくい。

ただ、ここで問題になるのは、「女身成仏」と「女人成仏」の語が道元の著作の中で、果たして同じ意味で扱われていたのかということである。これに関しては今少し考察の必要があるが、吉田道興氏が述べているように、「女身成仏」という語は、「竜女成仏」を想起させ、「女人成仏」よりも肉感的に感じられる。⁽⁷⁾

当時の人間が、そして道元が「女人」と「女身」とをどうとらえていたかについてはいまだ不明の点も多いが、この問題が、道元の出家・在家観とも深く関わりを持つであろうことは疑いないであろう。道元の女性観についての考察は、道元が「女人成仏」をどう見ていたかにその焦点がある。そしてその解答への鍵の一つは、一連の論争の中で見出されるか

もしれない。それは今後の研究課題としたい。

本稿で述べてきたように、「女人成仏」は宗学上の論争の一つの論点となっており、その意味での重要性は、宗学研究者の間において一定の了解事項となっている。しかし、宗学上における「女人成仏」論争の焦点は、あくまでも道元が思想的変化を経たかどうかという点にあるのであり、女性が実際に「成仏」できるかどうかについて論じたものではない。

また、宗学者で、女性の「成仏」という課題そのものに関心を抱き、取り組んだ者はこれまでほとんどいない。これは女性に関心の対象外であったことをはからずも露呈している。

現代社会の要請として、曹洞宗学のみならず日本仏教各宗の教学・宗学に人権的視座が求められている現在、教団としてマイノリティや被差別者の問題を避けて通ることはできなくなっている。今後、各教団はこれらの問題に対して、的確かつ適切な対応が求められることとなるであろう。

- 1 「出家功德」大久保道舟『道元禅師全集』上、一九六九年、筑摩書房、六二二頁。
- 2 「礼拝得髓」大久保道舟『道元禅師全集』上、一九六九年、筑摩書房、二四七～二四八頁。
- 3 河村孝道『正法眼蔵の成立史的研究』一九八五年、春秋社。
- 4 伊藤秀憲『「正法眼蔵」に見られる在家・女人の成仏非成仏について』『宗学研究』二二号、一九七九年、曹洞宗宗学研究所、一四〇頁。

- 5 今枝愛真『中世禅宗史の研究』一九七〇年、東京大学出版会、五二～五三頁。

- 6 石川力山『道元学の今』『師家養成所講義録』一九九一年、曹洞宗宗務庁、三七～三八頁。

- 7 吉田道興『道元禅師の比丘尼・女人観』『日本仏教学会年報』五六号へ特集・仏教と女性、一九九一年、九三頁。

〈キーワード〉 女人成仏、道元の思想的変遷、変成男子

（曹洞宗宗学研究所所員）

新刊紹介

瓜生津隆真 校註

新国訳大蔵経 インド撰述部 釈経論部二三

十住毘婆沙論二

A5版・三八一頁・定価九、八〇〇円
大蔵出版・平成七年一一月